

皇帝フリードリヒ2世 —交易ネットワークと学知文芸の再編者—

■神聖ローマ皇帝としてのフリードリヒ 1194年12月26日、神聖ローマ皇帝ハインリヒ6世とシチリア王女コスタンツァの子として、フリードリヒ2世 (Friedrich II, 1194-1250) はイタリア中部のイエージで生を享けた。彼の名は正確にはフレデリクス・ロゲリウスという。それはシュタウフェン家のフリードリヒ1世バルバロッサとオートヴィル家のシチリア王ロゲリウス2世という、祖父にして二人の名君にちなんだものである。フリードリヒは1197年にシチリア王位を、教皇の支援を受けて1212年にイタリア王位を、1214年のブーヴィースの戦いで敗北でオットー4世が求心力を失った隙をついて、1220年にドイツ王位ならびに神聖ローマ皇帝位を手中に収めた。フリードリヒは、法学学位を持つ一連の教皇や隣の大団フランス王国と一時的に協調し、ドイツ内の帝国諸侯にも特権を確認することで、国際関係と支持基盤を確実なものとした。

かくして13世紀の初頭に、アルプス以北のドイツ、ローマの伝統が色濃く残る北イタリア、先進的かつ諸文化の混交する地中海文明で彩られる南イタリアを同時に支配する君主が誕生した。彼が手中にしたのは、バルト海から地中海までヨーロッパ半島を縦断する広大かつ起伏に富む統治空間であった。

■神聖ローマ帝国と海域世界 13世紀は中世商業革命の時代である。その商業革命の原動力となったのは急速に拡大する海上交易ネットワークであった。北ヨーロッパでは、リューベックを盟主とする商業共同体であるハンザの力がいや増しつつあり、グリーンランドからロシアまで巨大な交易空間をヒト・モノ・カネが往来した。ドイツから北海・バルト海へのアクセス路には、フリードリヒが出自とするシュタウフェン家のライバルであり、ザクセンに勢力を張っていたヴェルフェン家が大きな影響力を行使していた。しかしフリードリヒはヴェルフェン家の支配圏を徐々に蚕食するとともに、1226年に彼からプロイセン支配を認められたドイツ騎士修道会が、バルト海沿岸部の交易活動で重要な役割を担い、帝国内の交易システムを変化させつつあった。

他方でドイツ中部を拠点とするシュタウフェン家は地中海をも目指した。パレルモに宮廷をおいたフリードリヒは、中世商業革命で栄えるイタリア諸都市との関係も構築し、地中海交易に積極的に関わり始めた。そして、教皇から破門を受けながらも第6回十字軍を敢行した。1229年、フリードリヒは、アイユーブ朝のスルタン、アル=カーミルと交渉することで、エルサレムを無血開城させた。彼は、従来の王位に加えてエルサレム王をも名乗った。

こうして皇帝フリードリヒは、ドイツ王、イタリア王、シチリア王、エルサレ

ム王として、北海・バルト海と地中海双方を視野に収める支配空間を手中にした。1231年にはイタリアのメルフィでローマ皇帝の勅令を集成し、それらを支配空間内に定着させようとした。海域ネットワークを有する南北の海域世界と司教座都市や帝国都市が林立する大陸世界はフリードリヒの下で連接し、ヨーロッパ半島を南北に貫く経済空間が形成されつつあった。

■学知ある皇帝 安定した交易ネットワークがもたらすのはカネとモノだけではない。従来知られていなかった情報や知識をも宮廷にもたらした。中世の世俗君主は文字すら読めないとしばしば揶揄されるが、その対局にいたのがフリードリヒであった。父の言葉であるドイツ語と母の言葉であるイタリア語のみならず、学術言語であるラテン語やギリシャ語、そして地中海言語たるアラビア語も習得していた。経験主義に基づく科学実験を繰り返し、人体に対する知見も積み重ね、ナポリ大学を創設した。

もともと宮廷が置かれたパレルモは、12世紀のノルマン・シチリア王国の時代以来、ラテン・ギリシャ・アラビア・ヘブライといった各種言語の学知が集積する場であった。イドリシーの世界図はその典型である。13世紀に入り、アルプス以北に父祖の地を有するフリードリヒがここに宮廷を定めたのも、そうした国際性を持つパレルモが、地中海ネットワークの一つのハブであったからと推測される。宮廷にはマイケル・スコットのような占星術師、天文学者、數学者らが集い、数多くの文献が生み出される場となった。アラゴンから嫁いだ妻コスタンツァを通じた西地中海の諸文化は、シチリア派と呼ばれる世俗語叙事文学が栄える後押しをした。地中海のみではない。フリードリヒ自身が著述した『鷹狩の書』では、グリーンランドで捕獲された鷹が語られた(図1)。これはアルプス以北の知識やモノが地中海に接続したことでもある。

■晩年 しかし華やかなフリードリヒの生涯は、混亂のうちに幕を閉じる。ドイツでは諸侯の権力強化を見、イタリアでは権益を巡って教皇や都市国家と対立し、息子や腹心による反乱計画が幾度も起こった。広大な統治空間を安定的に支配することは困難を極めた。彼の死後、ドイツは、君主なき大空位時代を迎える。

[小澤 実]

参考文献

- [1] カントローヴィチ, E. H. (1963), 小林 公訳 (2011)『皇帝フリードリヒ2世』中央公論新社。
- [2] 濑谷幸男・狩野晃一編訳 (2015)『シチリア派恋愛抒情詩選—中世イタリア詞華集』論創社。



図1 「フリードリヒ2世と鷹」
〔『鷹狩の書』、13世紀末〕